

ひらつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM '88 2月号

*** 2月の行事 ***

2月

6	土	古文書講読会
13	土	土曜観察会／石仏を調べる会
14	日	「みんなで調べよう蛙」ガイドンス
20	土	古文書講読会
27	土	土曜観察会／石仏を調べる会

- ・寄贈品コーナー(2~28)民俗部門の展示
- ・プラネタリウム(2~28)宇宙への道

3月

5	土	古文書講読会／土曜観察会
12	土	石仏を調べる会
13	日	相模川を歩く会

- ・特別展(12~4/17)湘南のシダ植物
- ・寄贈品コーナー(1~30)考古部門
- ・プラネタリウム(5~)おとめ座の世界



●春期特別展「湘南のシダ植物」

ワラビ、ゼンマイ、ウラジロなど、シダは私たちの生活に関わりの深い植物です。湘南地方に生育する150種類を一同に展示し、その多彩な姿を紹介します。

期間：3月12日(土)～4月17日(日)

会場：博物館特別展示室(入場無料)

●体験学習No.104「拓本墨を作ろう」

日時：3月27日 午前10時～午後3時

場所：博物館科学教室

参加費：700円(材料代)

申込み：往復ハガキに住所・氏名等を記入のうえ、3月18日までに博物館へ。多数の場合は抽選で15名まで。

●星を見る会「日食を見よう」

部分日食を観察します。

日時 3月18日(金)10時～12時30分

場所 博物館屋上

参加自由

●移動博物館

次の日程で移動博物館を開きます。ほかの地区の方も是非ご来館くださるよう願っています。

2/20～21 「平塚の野鳥展」 横内公民館

本殿 ~~2/27～28~~ 「平塚の遺跡展」 旭公民館

“ “ “ 「自然観察展」 旭北公民館

3/5～6 「平塚の野鳥展」 松ヶ丘公民館

3/12～13 「平塚の遺跡展」 神田公民館

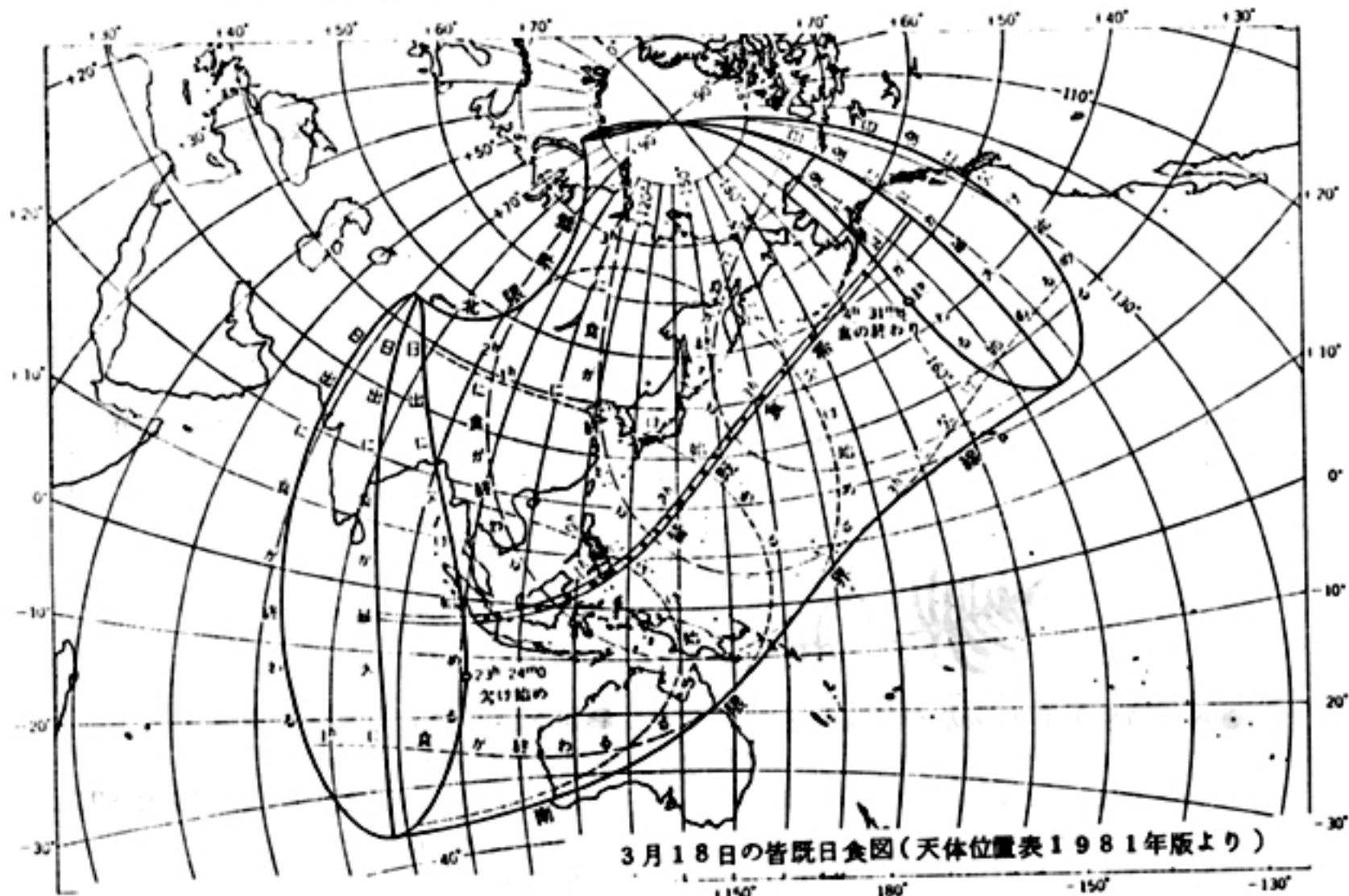
以上、各会場とも開催時間は午前9時～午後4時までです。お間違いのないように申し添えます。

— 3月18日の日食 —

平塚での日食観察

今年最大の天文現象といえる皆既日食が、3月18日に起こります。図のように小笠原近海を皆既日食帶が通っていますから、平塚でもかなり欠けた太陽を見ることができます。

昨年9月23日の秋分の日にも見られましたが、あの時よりも深く月が入り込みます。



平塚での日食の見え方

では、平塚での日食の見え方について説明しましょう。日食が見られるのは午前中からお昼にかけてです。日食のはじまりは、10時8分、太陽の右下から欠け始めます。その時の太陽は南々東の空にいます。その後日食は進行し、11時24分、最大となり三日月のような姿になります。この時平塚では太陽が月に75%もかくされ、地上の風景も少しうす暗く感じられるほどになります。

日食が終わるのは12時40分です。日食の始まりから終わりまでの時間は2時間半、太陽が最も欠ける11時代を中心に観察してみてください。

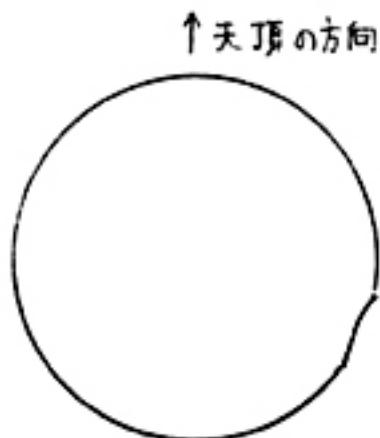
日食を見るには

観察には、太陽の光が大変強いですから、直接見るには減光用のサングラスが必要になります。

長時間観察をする場合は、既製の太陽観察用の教材がありますので、できるだけそういうものを使ってください。短時間見るだけなら、白黒フィルムのリーダー部分(まっ黒になっている所)を重ねて使うか、台所用の薄手のアルミ粘着テープや装飾用粘着テープを重ねてガラスに貼りつけて使ってください。

日食の進行状況

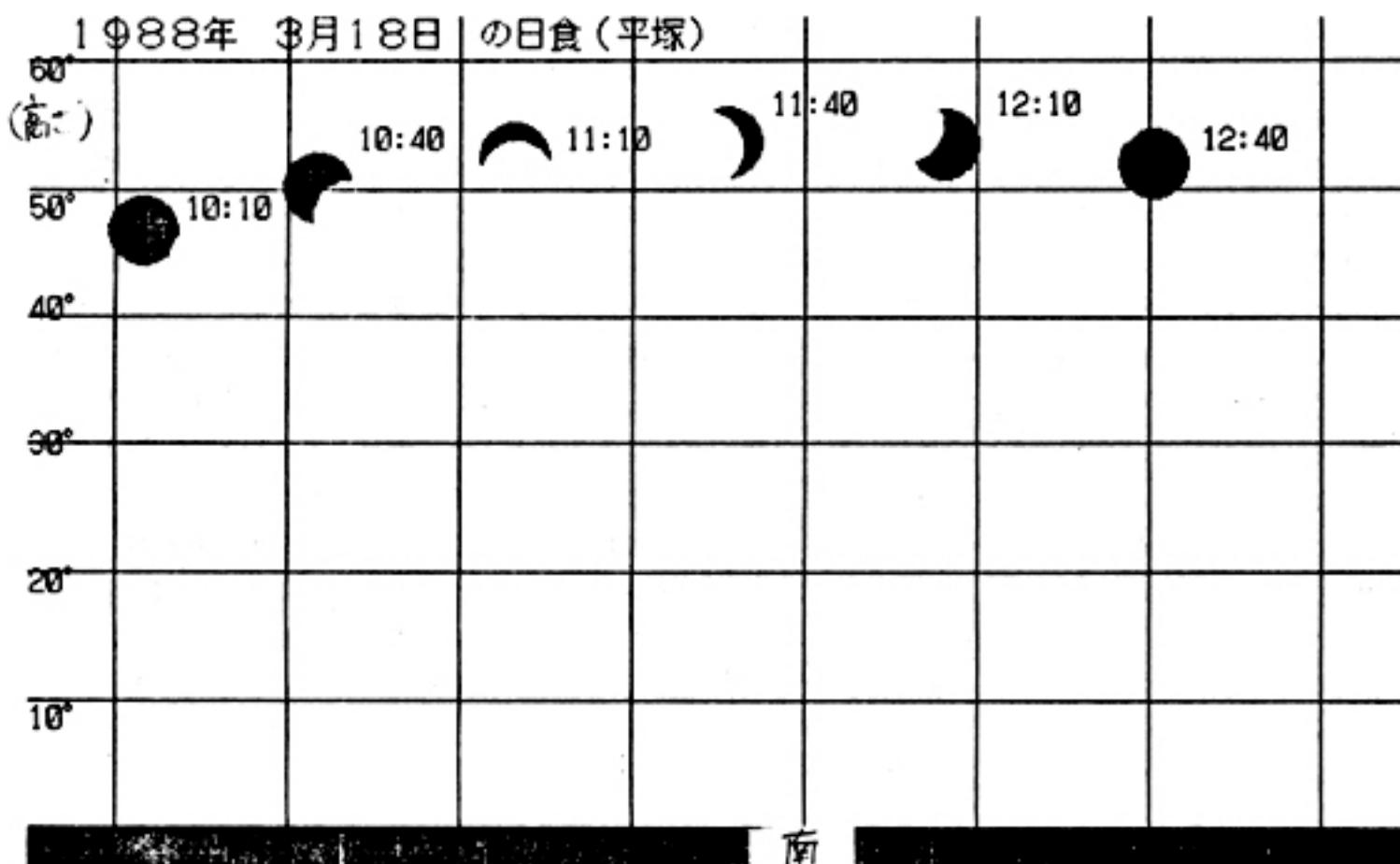
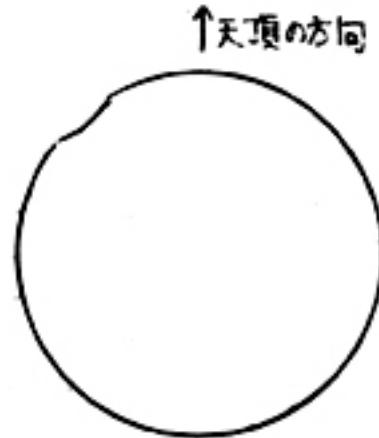
10時10分



11時20分



12時40分



日食を楽しもう

太陽を直接見る方法以外にも、太陽を間接的に見る方法もあります。葉の繁った木の下に落ちる木もれ日が太陽が欠けるにつれ、三日月型の太陽像をたくさん作ります。これは針あな写真機の原理によるものです。この原理を使えば、自分でも木もれ日が作れます。大きな厚紙のまん中に直径1ミリ位のあなをあけ、白い板にかざすと太陽の像が板に写ります。

いろいろ工夫して日食を楽しんでください。

博物館でも見られます

博物館でも観察会を行う予定です。屋上で望遠鏡を使って大きな太陽像を作り、欠けてゆくようすを観察します。興味のある方はぜひご参加ください。参加は自由です。くわしくは、第一面の行事案内をごらんください。(馬)

相模川を歩く会

1月24日(日)

見えるものから見えないものを見る
高田橋から小倉橋まで8軒のリポート

"相模川を歩く会"このしゃれた命名は、小川学芸員である。いまどき"歩く"だなんてと危ぶんでいたら、毎回30人を超える有志が参加なさるという。歩きつつ目に写るもの足にさわるもの街々のたたずまいから風にのってくる匂いまでしっかり我が身に引き受けて興がのれば隣り合う人と話し合い、暑いが浮かべば付き添う学芸員に聞いてもらい、要所では学芸員の説明がある。例えば田名は相模川にくついたひなびた町にしては割烹や料亭の看板がやたら目につき、それとわかる大門構えに出くわす。なぜか。ここは水郷田名と呼ばれる鮎の名所で、渡船も栄えた所だからだと聞いてくれた。田名八幡社では大笑いした。社殿のうしろの石囲いにひょろ長い石が3本ある。左からパンバ石ジンジ石メカケ石だという。日曜日続々の雨乞いに、パンバ石を川に沈める、するとジンジ石が寂しがって泣きわめく。そりや可哀いそうだと里人がきれいなメカケ石を配してくれた。なるほどパンバ石はひび割れて針金巻きになっている。ジンジ石は偉そうに貝殻なんかはめこむ石を見立て、メカケ石はいかにも白く艶やかであった。ところが三石並ぶとパンバが妬いて角を出すから針金巻きかと言う方があつて思わず大笑いになつたのだけれど、ジンジ石のパンバ石のと言ひながらも、たちうち出来ぬ自然界のいとなみに寄りそつて暮らさねばならぬ明け暮れの、平らかであつて欲しい願いが小川学芸員のはなす話のうらから立ち現れて、川と人との間をつなぐ祭を介して、共に存し共に栄えようとはかつた昔人のありようがよみがえつてくる気がした。

河原におりた浜口学芸員の話からは、木々も草も空飛ぶ鳥も水底にひそむ小さな虫までが、同じ命を持って呼びかけてくるような気配がした。ヨシには地下茎と地上を這うツル性のものがある

が、どっちの繁殖が早いかと問うておいて、地道を掘るより上をゆく方が早いとすまして仰言る。中津層の白い岩石がのぞく崖に繁る縁がとりわけ美しかったので聞いたら、あれはあらかしの群れの由。「この木は岩石にじかに生い立つ木」と教えられれば、「ここまで成長するにはずい分長い歳月が必要だったに違いない」と推測できる。その縁をかすめて、セグロセキレイが遊びカモメが飛ぶ。相模の海からの遠征だそうだ。はたして3時を合図かのように川下に帰つていった。とすかさず「上の方にはよっぽど良い事があるのでしよう」と言われたのでアッと思った。人の思いと素直に重ねられる言葉は、即座にさらりと吐けるものではない。それからコリ柳が話題に上る。「柳はもともと河原の木だが、折れてもすぐ芽を出す強い木なのだ。ただしこれはイヌコリ柳で、柳行李の材料には使えない」という。いま行李の需要は少ないにしろ、その材料に使えぬからイヌとかぶせてこの木を呼んだに違いない。暮しの智慧を人にも分かち、無駄な苦労を省かせる親切が、役に立たぬ柳にさえ名をつけさせたのであろうか。面白かったのは、ここに葉山とか湘南という地名があることだった。海から28軒余り離れているのに、変だ!きっと誰かが調べて、次の四号誌に載せることだろう。河原を出たら全員コセンダン草のトゲをつけられて、気分は針鼠とばかり大あわてで払いおとす一幕があった。白い小さな綿毛をつけた河原野菊は、こと多摩川と静岡の安部川にしかないと教えられたので、地図に示しておく。

歩く会は2回歩いて3回目にまとめを書く。見聞を書き、過去の記録を調べることも、この会のプログラムなのである。「平塚からだんだん離れてゆくから、往来が大変になりますね」といったら、「そしたら前の晩に泊つて、朝早くから歩き出せば大丈夫ですよ」と返ってきた。この方達のなんという御健脚か!この日相模川田名の高田橋から城山町川尻の小倉橋まで、青く澄み渡つた空の下を冷たい風にふかれて、どっちかといえば実年以上のお年柄31名が歩いたのに、落後なく事故もなく、いや意欲ますます盛んといった方が早い。



10回目のたった8軒の随行にすぎぬが、見
えなかつたものを見せて貰い、教えられて納得す
れば、やがてのこと、ものに対する目線が肥えて
今度は我が目で、対するものの裏表が読みとれる
かも知れぬ。フッとそんな予見が胸をかすめた。
若しかしたらこの方達の目には、見た目の裏にあ
るもののが見え始めているのかも知れない。(和田)

『国土地理院発行5万分の1地形図「八王子」による

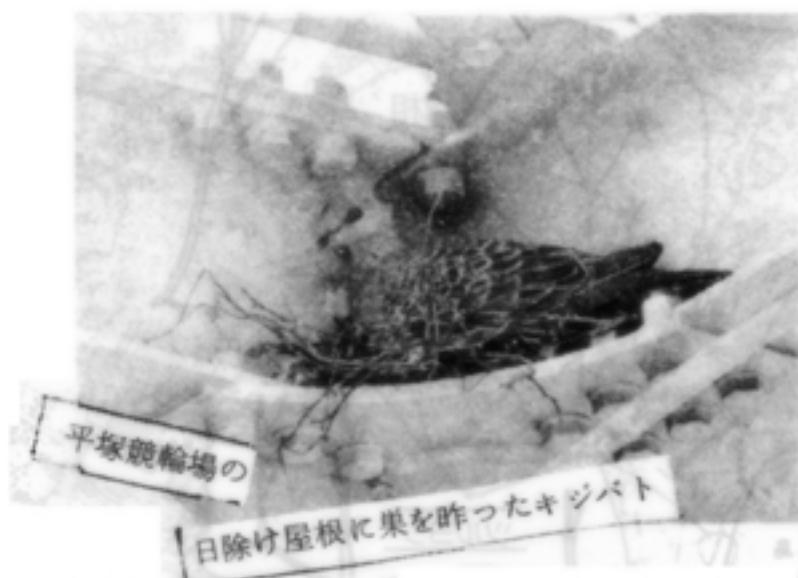
街に生きる動物たち

二階展示コーナー No.27

●街路樹を見上げよう

葉をすっかり落として裸になった街路樹や庭の木の枝に注意すると、思わぬ発見をすることがあります。人通りの多い道に面したところでも、案外多くの鳥の古巣が見つかるのです。文化センター公園のイチョウやサクラにも、毎年いくつかの巣が姿を現します。

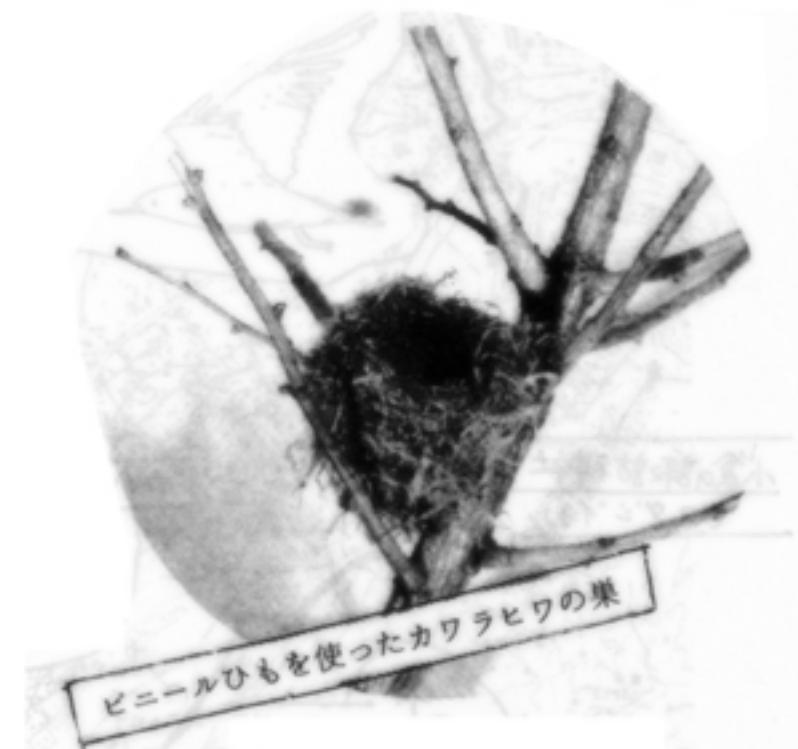
こうした所に巣を作る鳥の種類は限られているので、巣の形や大きさからその種類を知ることができます。枯れ枝を乱雑に積み重ねただけの簡単な巣はキジバト（山鳩）です。小枝や枯れ草を丁寧に編んだお椀形の巣は、直径20cmくらいあればヒヨドリ、15cm以下ならカワラヒワのものです。直径が50cm以上あるような大きな巣はカラス類です。



●人工物を使う

鳥の古巣を観察してみると、興味深いのは、その材料に人工的な物が多く選ばれているということです。特に多いのはスズランテープなどと呼ばれるビニールひもで、ヒヨドリやカワラヒワの巣には、それを細かく縫いたものが、必ず使われています。また平塚ではまだ見つかっていませんが、キジバトやカラスの中には、枝の代わりに針金を使った例も知られています。都市は鳥の生活にとって暮らしやすい環境とはいえません。そこに生きるために人工物を巧みに生かす適応力が

要求されるのです。展示してあるカワラヒワの巣をよく観察してみて下さい。



●変わる都市鳥の世界

スズメ、ムクドリ、ツバメのように都市の中で生活している野鳥を「都市鳥」と呼んでいます。都市鳥の中にはスズメのように昔から人里に生活していた種類もあれば、近年になって急に都市に進出してきた種類もあります。その代表はヒヨドリで、以前は山でもなかなかその巣は見つからなかったのに、今では窓からよく見える庭木にも平気で巣を作るようになりました。その変化は1970年頃起こったことが分かっています。

こうした意味で、現在注目しておきたい種類はイソヒヨドリです。春になると平塚の駅ビルや市役所のアンテナ等で、きれいな声でさえずっている鳥に気がつかれたことがあるでしょうか。それがイソヒヨドリです。もともとは海岸の崖に住む鳥ですが、崖とコンクリートの建物が共通点があるためか、最近都市で巣を作るものが増えているのです。今後の動向に注意していきたいと思います。どんな鳥が都市鳥にあたるのか、展示の中で頭に入れて下さい。（浜口）